

男子学生の母性看護学実習指導に関する文献的考察

豊田裕美子, 岡永真由美

神戸市看護大学

Clinical Teaching for Male Students on Maternity Nursing : Literature Review

Yumiko Toyoda, Mayumi Okanaga

Kobe City College of Nursing

Abstract

To examine how clinical teaching for maternity nursing has been conducted for male students, online Japanese-language literature released between 1989 and 2000 was searched for several keywords : male students, maternity nursing practicum, maternity nursing, nursing education and curriculum. Detailed study was made of 9 items of retrieved literature.

The results show that in providing practicum for male students, particular attention is paid to 4 factors : overall clinical approach, practicum methods, clinical matters and male students.

In the male students' view, there are both positive and negative aspects. During their internship, they usually give special consideration to their way of approaching patients, both psychologically and physically. It was also found that such clinical teaching helps deepen their understanding of the mentalities and roles of fathers, male nurses' roles in maternity nursing, paternity and maternity, and newborn children.

These findings suggest that in clinical teaching we should give due consideration to the patients involved, including obtaining patients' consent regarding internship of male students ; collect detailed information on how practicum is going and what patients' reactions are, by establishing close liaison with hospitals ; and make commensurate adjustments to clinical teaching. Moreover, orientation should be given in advance to students who are to receive clinical teaching to enhance their understanding of the importance of such clinical teaching.

Key words : 男子学生 (male students), 看護学実習 (nursing practicum), 母性看護学 (maternity nursing), 実習指導 (clinical teaching)

1. はじめに

平成2年4月から施行された「保健婦助産婦看護婦学校養成所指定規則の一部を改正する省令の交付について」(以後カリキュラム改正とする)によって、看護基礎教育における母性看護学実習は、男子学生、女子学生の区別なく実施されるようになった。

本学は、平成10年度より、男子学生2名を含めた母性看護学実習を開始した。学生は、母性各期にある母子とその家族への看護を学ぶために、外来実習や両親学級の見学、分娩室実習、産褥、新生児実習を行う。母性看護学実習の特徴は、対象が周産期にある女性とその家族であること、また援助内容に乳房ケア、悪露交換など生殖器に関わる場面が多いことがあげられる。

しかしながら、対象の羞恥心への配慮のために、昨年度の男子学生の実習は、新生児看護を中心とした実習内容であった。そのため、男子学生と女子学生との間で実習スケジュールが異なり、見学項目や援助の実施項目に差が生じた。また、1グループ(学生6~7人で構成)が、さらに2~3人の小グループに分かれ、妊娠、分娩、産褥、新生児の実習目的に応じて実習を行う。実習指導は主に、教員、臨床指導者やスタッフが行うが、実習フロアが複数にわたるため、特に教員の指導が行き届きにくい現状であった。そのため、学生との調整がタイムリーに行えず、学生がストレスを大きく感じた等の課題を感じた。

そこで、今回、男子学生の実習に焦点を当てた文献より、看護基礎教育における母性看護学実習で、実習

指導を行う上で工夫した点、配慮した点を検討すると共に、本学の母性看護学実習における実習指導の展開について考察することとした。

2. 文献検討の方法

文献は、平成2年のカリキュラム改正にあわせ、平成元年から平成12年5月までで、キーワード「男子学生」、「母性実習」、「母性看護学」、「看護教育」、「カリキュラム」を用いて、医学中央雑誌のオンライン検索を行った。そのうち入手できた会議録を含む29文献のうち、男子学生の母性看護学実習指導に関係すると考えられた9文献について検討を行った。9文献の主な内訳は、男子学生の母性看護学実習状況の調査、母性看護学実習における男子学生の反応の調査、実習上の留意点に関する調査、男子学生の実習レポート内容の分析などであった。これらの文献を「実習内容」、「実習方法」、「学生への配慮」、「学生の反応」、「臨床への配慮」に焦点を当て検討した。

3. 結果

文献は、総説、資料、会議録であった。その中でも、会議録が16文献と一番多かった。年次別では平成4年が8文献であり、そのうち会議録が7文献であった(表1)。

今回、分析の対象とした9文献の研究デザインはすべて記述研究であった。文献の要旨は、表2にまとめた。

それぞれの文献を検討した結果、①教員が母性看護学実習実施にあたり配慮、留意した点と②母性看護学実習に関する男子学生の反応に分類できた。

1) 母性看護学実習実施にあたり配慮、留意した点

本田ら²⁾は、アンケート結果より、教員が男子学生の母性看護学実習を実施する上で留意したことを自由記載から分類した。

①臨床場面に関すること：乳房マッサージや悪露交換などのケアは、臨床指導者、教員、スタッフ、女子学生が同行し、男子学生単独でケアをさせない、対象の身体に直接触れる援助はさせないなど。②実習方法に関すること：母性看護学実習の前に他の実習で女性患者の看護を経験させる、女子学生とペアで受け持つなど。③対象の選定に関すること：事前に対象の了解を得る、病棟関係者(医師、婦長)の理解を得て、対象を選定し了承を得てもらうなど。④実習前の学生指導に関すること：学生へのオリエンテーションを個別に行う、看護師としての役割、認識、看護の視点で実習するよう働きかけるなど。⑤指導者に関すること：教員と指導者の連絡調整を十分にする、男子学生の背景について説明するなどであった。これらの自由記載の分類では、①臨床場面に関するものが最も多かった。

横山ら^{4,6)}の調査で、カリキュラム改正後、男子学生の母性看護学実習実施において、学校側が配慮、調整したことは、①臨床側への全般的な働きかけに関するもの、②実習方法に関するもの、③臨床場面に関するもの、④学生に関するものに大別され、本田ら²⁾とはほぼ同様の結果であった。

1) - 1 受け持ち対象に関すること

受け持ち対象に関することへの配慮については、受け持ち対象の承諾を得ること^{2,4,6)}、受け持ちの選択は経産婦、育児に自信がある、協力してくれる人とする^{4,6)}、受け持ち選定時に対象と学生の個性性を考慮しながら選ぶ²⁾などの内容が多かった。

また、プライバシーや羞恥心への配慮として、男子は一人で行動せず、指導者、スタッフと共に行動する^{4,6)}、女子学生とペアを組み、男子の単独行動はさせないようにした^{4,6)}、女性性器への看護、乳房ケア、悪露交換は女子のみとする^{4,6)}など実習時のケアの具体的な方法に関するものもあった。

表1. 年次別文献数

	平成元年	平成2年	平成3年	平成4年	平成5年	平成6年	平成7年	平成8年	平成9年	平成10年	平成11年	平成12年
総説	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
資料	1	3	0	1	3	2	0	0	2	0	0	0
会議録	1	2	0	7	0	1	1	0	4	0	0	0

1) - 2 実習方法に関すること

まず、学生に対しては、受け持ちは女子学生とペアで受け持つ^{2,4,5,6)}、母性看護学実習前に他の実習で女性患者の看護経験をさせる^{2,4,6)}、ペアの女子学生はしっかりした学生を組む^{4,6)}であった。

実習ローテーション、実習の進め方では、母性看護学実習が実習の後半になるようにした^{4,6,7)}、最初に新生児実習からはじめ看護師の存在に抵抗がないようにした^{4,6)}、新生児実習を主とし、母親への間接的看護をさせる²⁾、男子学生は1グループに1名ずつとし、だぶらないように配置した^{4,6)}などであった。

また、臨床に対しては、実習方法、項目についてスタッフ、医師、教員で検討する^{4,6,7)}、婦長、医師、指導者、教員の連携を密にとり、話し合う機会を持った^{4,6)}などがあげられていた。

1) - 3 男子学生への準備

教員の男子学生に対する配慮は、VTRで学習し実習をイメージ化した^{4,6)}、男子学生へのオリエンテーションを個別に行う²⁾、実習についての不安、希望など話し合う場を持つ^{4,6)}、看護技術の演習を密に行い実習姿勢が前向きになるようにした^{4,6)}などであった。

2) 母性看護学実習に関する男子学生の反応

文献検討の結果、男子学生の反応として、①男子学生自身に関すること：母性看護学実習への取り組みと受け止め方と②男子学生の学び：母性看護学実習における学びの2つに分類できた。

2) - 1 男子学生自身に関すること

本田ら³⁾、横山ら⁶⁾の調査では、男子学生の母性看護学実習のプラス面とマイナス面、両方の感想について検討していた。

男子学生が嬉しかったこととして、出産に立ち会えたこと、新生児に触れ実際に援助できたこと、対象者に受け入れられたこと、学習が深まった^{3,6)}等であった。反対に悩んだことは、対象者との対応や反応で、拒否された、嫌がられたことや授乳場面の居場所に困った、看護の内容が制限される^{3,6)}等が挙げられていた。

男子学生が実習中気をつけたことは、学生自身が性差を意識せず看護者として行動する、誤解されないようにするなど学生自身の態度や意識に関すること、対象者のプライバシーや羞恥心を守る^{3,6)}など対象への配慮に関することであった。さらに、対象の身体に直接触れるケアや羞恥心を伴いやすいケアの経験が多い男子学生は、看護者としての毅然とした態度、羞恥心を配慮する⁶⁾といったことを留意点に挙げていた。一方、実習体験に制限がある男子学生の留意点は、病棟、患者にいい印象を与えるために実習内容を無理強いない、対象に悪い印象を与えない⁶⁾などであった。

また、南ら⁹⁾によると、男子学生が受け持った褥婦は、学生の人柄、言葉使い、礼儀について「好感があった」と感じていた。援助については、恥ずかしい面もあったが、誠実に関わっているということですべて受け入れた、最初男性ということで嫌だなと思ったが、学生の真剣さが伝わり、親近感さえ持てた⁹⁾ということであった。

2) - 2 男子学生の学び

男子学生の学びとして、松成⁵⁾の研究では、男子学生の実習レポートの記述から、母性看護学実習における効果を検討していた。レポートの記述内容を抜粋したところ、①父親の心理、役割、②母性看護における看護師の役割、③父性意識の3つに分類された。また、分娩の大仕事を理解できた、母性、新生児についての理解が深まった、父性の役割の重要性が学べた、母と子の結びつきが学べた等もあげられていた^{3,6)}。

また、男子学生と父親との関わりにおいて、男同士の方が効果があり、看護婦とは違った役割がある、父親に指導することは、同性からのアドバイスの方が受け入れやすいなどの記述があり、男性の特性を生かした援助が行えていた⁵⁾。

4. 考 察

1) 臨床場面、臨床側への配慮

母性看護学実習の臨床場面に対する教員側の配慮として、受け持ち対象の選定時に、医療関係者の協力を得て、対象を選定してもらうこと²⁾や受け持ち対象の承諾を得ること^{2,4,6)}をあげている。母性看

表2 文 献

NO	著者名	文献名	年	誌名	巻	号	ページ	調査対象
1	本田千浪他 ¹⁾	男子学生の母性実習に関する調査	1989	母性衛生	30	3	399-405	短大(2,3年)13校 3年課程33校 2年課程62校 母性看護学実習の実情と教員の見解に対する実態調査
2	本田千浪他 ²⁾	男子学生の母性実習に関する調査(第2報)—母性実習実施校の背景と実施上の留意点について—	1990	母性衛生	31	3	366-372	大学2校 短大(2,3年)13校 3年課程33校 2年課程62校 学校背景による母性看護学実習の実態調査
3	本田千浪他 ³⁾	男子学生の母性実習に関する調査(第3報)—男子学生の見解—	1993	母性衛生	34	2	222-229	3年および2年課程の男子学生634名 (母性実習実施中、または終了87名、 実習実施予定85名、実習なし462名) のアンケートの自由記載から分析
4	横山孝子他 ⁴⁾	男子学生の母性実習に関する調査(第4報)—母性実習を実施していない学校の背景とその理由—	1994	母性衛生	35	2	143-149	カリキュラム改正後のアンケートの自由記載(2年課程18校)から分析
5	松成裕子 ⁵⁾	男子学生の母性看護学実習における効果	1993	第24回日本看護学会集録母性看護			150-153	男子学生4名の実習レポートの内容分析
6	横山孝子他 ⁶⁾	男子看護学生の母性看護実習について 改定カリキュラム後の実習状況	1993	看護教育	34	1	60-66	カリキュラム改正後のアンケート(2年課程18校)から分析
7	斉藤祥之他 ⁷⁾	新カリキュラムにおける男子学生の母性看護学実習に関する一考察	1997	母性衛生	38	1	43-49	男子学生3名と女子学生6名の実習内容の分析
8	橋津靖子他 ⁸⁾	男子学生の母性実習に対する看護学生の意識調査	1990	第21回日本看護学会集録看護教育			142-145	3年課程全日制の3年生、3年課程定時制の4年生253名(うち男子2名)の意識調査
9	南和子他 ⁹⁾	男子学生の母性実習受け入れ要因についての一考察	1994	日本助産学会誌			105-108	男子学生が受け持った褥婦2名と同室褥婦9名のアンケート調査

の 要 旨

実習内容	実習方法	学生への配慮	学生の反応	臨床への配慮
妊婦: 定期健診、母親学級、個人指導 産婦: 胎児娩出の見学、陣痛児心音の経過観察 褥婦: 沐浴指導、子宮復古の観察、退院指導、授乳指導 新生児: 新生児看護全般				
	①実習前に、女性患者の看護経験をさせる ②女子学生とペアで受け持つ ③新生児実習を主とし、母親への間接的看護をさせる ④母性実習を他の実習終了後に組む	①看護師としての役割、認識、看護の視点で実習するよう働きかける ②学生へのオリエンテーションを個別に行う ③学内実習で事前準備を十分に行う		①ケアは教員、スタッフ、女子学生が同行し、単独行動させない ②事前に対象の了解を得る ③指導者と教員の連絡調整を密にとる
			嬉しかったこと: 出産に立ち会えた、学習が深まった 悩んだこと: 対象者との反応、拒否される、嫌がられる 実習中気がつけたこと: 看護師として意識をもつ、毅然とした態度を持つなど学生自身の意識態度、対象者のプライバシー、羞恥心への配慮をする	
	①受け持ちは女子学生とペアで持つ ②対象は経産婦、育児に自信がある、協力してくれる人など	①VTRで学習し、実習をイメージ化した ②実習についての不安、希望を話し合う場をもつ ③実習の心構えを話し合ったなど		①教員、スタッフの連携を密に取り話しあう機会を持った ②受け持ちは対象の承諾を得る ③ケアは教員、スタッフ、女子学生が同行し単独で行動させない
妊婦: 母親学級見学、計測 産婦: 陣痛児心音の経過観察、胎児娩出時の見学 褥婦: 一般状態の観察、子宮底長の測定 新生児: 新生児看護全般	①女子学生とペアで受け持つ ②病棟指導者または教務と援助にあたる		学び: ①父親心理、役割 ②母性看護における看護師の役割 ③父性意識	
妊婦: 定期健診介助、レオポルド触診 産婦: 胎児娩出の見学、陣痛児心音の経過観察 褥婦: 子宮復古の観察 新生児: 新生児看護全般		①実習をイメージ化したり実習姿勢を高めるための事前学習 ②学生との話し合いの場を作る ③女子学生への働きかけ	嬉しかったこと: 病棟の医師、受け入れがよくスムーズに実習できた、分娩見学ができた 悩んだこと: 対象の受け止め方が気になる 実習中気がつけたこと: 自分との接触がストレスにならないように、対象にいい印象を与える	①教員、スタッフの連携を密に取り話しあう機会を持った ②受け持ちは対象者の承諾を得る ③ケアは教員、スタッフ、女子学生が同行し単独で行動させない
妊婦: 母親学級見学 産婦: 胎児娩出見学、胎盤計測 褥婦: 授乳介助 新生児: 新生児看護全般	3週間の実習: 1週目項目実習 2週目: 可能であれば入院時より産婦を受け持ち、引き続き褥婦、新生児を受け持つ。受け持ち機会が得られるまでは、項目実習や外来実習を行う。			
		男子学生の母性看護学実習実施に条件付き賛成。妊産褥婦の了承、指導者の同席、実習項目の選択が必要。		
褥婦の受け入れ—保健指導、一般状態の観察、授乳介助、腹部子宮底の観察			学生の反応からの褥婦の印象—人柄、言葉使い、礼儀について好感があった	

護学実習では、乳房マッサージや子宮復古状態の観察のために、乳房や下腹部を露出するなど対象にとってプライバシーに関わり、羞恥心を伴うケアがある。

対象に男子学生が関わるケア内容を具体的に説明し、承諾を得ることは、男子学生がどんなケアに関わるのかが伝わり、羞恥心への配慮や対象の権利を保障するために重要な手続きである。また、乳房マッサージや悪露交換などのケアは、教員、臨床指導者、スタッフと一緒にいき、男子学生単独でのケアを避けるようにする。

産褥早期の褥婦は、子宮復古や乳房緊満といった身体の生理的変化だけでなく、心理的にも自分自身のことで手一杯という状態にある。褥婦は、時間の経過と心身の回復により、徐々に児に目が向けられるようになり、また育児に対する不安や喜びなど、心の変化も著しい。さらに、出産後の急激なホルモンの変動の影響もあり、心身の状態は、毎日めまぐるしく変化するという対象の特徴がある。よって、男子学生のケアに対する受け持ち褥婦の反応に気をつけるなどのきめ細やかな配慮、調整が必要である。

しかし、実習期間中、対象のすべての反応を教員が把握することには限界がある。そのため、関係する部署の臨床指導者、スタッフと教員が、受け持ち対象の心身状態や学生に対する反応、また学生がどのように関わっているかなどの実習状況の情報交換を行い、連携を密にとることが望ましい。文献でも、婦長、医師、指導者、教員の連携を密にとり話し合う機会を持った^{4,6)}、指導者と教員の連絡調整を十分にする²⁾、実習内容を教員、指導者、医師で検討した^{4,6,7)}と臨床側との連携に関する留意点は、多くあげられており、臨床側と話し合う機会を持つことは必要である。

これらにより、学生がより学びを深められるよう、実習環境に入りやすいように調整していくことができると考える。

2) 男子学生への配慮、指導

男子学生が悩んだこととして、対象に受け入れられないのではないか、迷惑がられないか、という男子学生自身の戸惑い、気持ちに関するものがあつた^{3,6)}。学生にとって対象との実際の関わりがうまくいくかどうかは、実習の効果に影響を与える大きな要素であると考えられる。

対象の身体に直接触れる項目や羞恥心を伴いやすい項目において、ケアの経験が多い男子学生が自ら気をつけたところは、①看護者としての毅然とした態度、②羞恥心を配慮する^{3,6)}などであった。また、実習学生の態度いかんで相手に受け入れてもらえるものと確信したという男子学生の意見もあつた⁶⁾。

これらのことは、学生自らの実習態度、対応が対象の受け入れに大いに関与していることを示している。学生自身の誠実な実習態度や対応が、対象との人間関係を結びやすくすると考える。また、男子学生の意見で嬉しかったこととして、対象の受け入れが良かった^{3,6)}というプラスの感想があり、実習に臨む学生の意識、態度によって、実習が取り組みやすくなると考える。

さらに、男子学生の意識や態度が実習展開に影響するということを、男子学生自身にも意識させるような教員の関わりが必要になってくる。そして、実際に実習場面において、誠実な言動や看護学生として毅然とした態度がとれるよう教員が関わる必要があると考える。そのために、学生へのオリエンテーションを個別に行う²⁾、実習についての不安、希望など話し合う場を持つ^{4,6)}ことは、男子学生自身に実習に臨む態度、姿勢を意識化させる動機付けになると考える。

男子学生が実習中悩んだこととして、授乳場面の居場所に困った、看護の内容が制限されるなど^{3,6)}が挙げられていた。これらは、実習時のケアの具体的な方法に関係した内容であり、男子学生がどのように対象へのケアを行うかという実習方法にも関連していると考えられる。男子学生が、異性だから看護ケアが実践できない、わからないと母性看護学実習に対して消極的になることのないよう、教員や臨床指導者の手助けが必要になってくる。ケアの実践に関して、教員や臨床指導者、スタッフが共に行うだけでなく、事前に男子学生に対して実習方法の具体的な説明を行う。このことにより、男子学生自身が対象にどのように援助をして実習をすすめていくかがイメージでき、不安の軽減につながるのではないかと考える。

文献において、事前の個別オリエンテーションの内容に、実習環境に関する具体的な記述はなかった。しかし、本学の母性看護学実習では、実習施設の特徴から実習フロアーが複数にわたる。そのため、オ

リエンテーション内容に、それぞれの実習フローのおおまかなケアの流れや実習計画の調整、報告する臨床指導者やスタッフの存在などを含めることが必要になってくる。このことにより、男子学生が、実習環境の把握をスムーズに行え、実習の場で悩んだことに遭遇した時、男子学生なりの対処が見いだせ、実習に臨めるのではないかと考える。

現在、本学での母性看護学実習は、対象の羞恥心への配慮のために、女子学生と男子学生の実習内容の一部が異なるという現状がある。しかし、男子学生が受け持った褥婦のアンケート結果⁹⁾では、「援助については恥ずかしい面もあったが誠実に関わっているということですので受け入れた」という意見があった。このことから、男子学生の実習態度によって、対象の理解が得られ、多くの援助が実施可能であると考える。

したがって、男子学生の実習への準備状態と対象との関わりによって、実習内容の拡大が可能である。

また、最初に新生児実習からはじめ看護師の存在に抵抗がないようにした^{4, 6)}、新生児実習を主とし母親への間接的看護をさせる²⁾といった実習方法によって、男子学生は実習環境に入りやすく、実習しやすくなると思われる。

本学の場合、男子学生数は1学年あたり、1～2名である。そのため、男子学生の母性看護学実習が通年で実施されているわけではない。母性看護学実習後の教員の感想として、スタッフが男子学生にこだわると患者も構えて学生も構えてしまう⁶⁾とある。男子学生をあまりにも特別視してしまうと、かえって学生が意識してしまい、消極的な実習となる可能性がある。このことは、スタッフだけでなく、教員側も同様である。よって、男子学生と関わる教員や臨床指導者、スタッフが男子学生を特別視しないように気をつけていくことも必要である。

また、男子学生特有の学びもあり、父親への育児指導や心理的支援など看護師として援助の可能性を示唆することによって、男子学生自身が性差をプラスの要素としてとらえ、実習に臨みやすくなるのではないかと考える。

5. まとめ

男子学生の母性看護学実習実施に対して、臨床側へ

の配慮、男子学生への配慮が行なわれていることがわかった。

臨床側への配慮としては、まず、対象への配慮があり、対象に承諾を得る、男子学生を単独で行動させないなどプライバシー、羞恥心を守ることであった。また、臨床指導者と連携を密にとり、調整を行っていくことなど臨床側への配慮も必要であることがわかった。

さらに、看護学生としての意識や態度が、対象の受け入れに影響を与える。そのため、男子学生に対して態度や意識を高めるような働きかけや看護師としての役割を示唆することで、プラスのイメージを持って実習が行えることが明らかになった。

今後、充実した母性看護学実習が展開できるよう、男子学生の実習に対する準備状態を高めると共に、実習期間中だけでなく臨床側と継続した密な連携を行っていきたいと思う。

文 献

- 1) 本田千浪, 今井孝子: 男子学生の母性実習に関する調査, 母性衛生, 30 (3): 399-405, (1989).
- 2) 本田千浪, 今井孝子: 男子学生の母性実習に関する調査 (第2報), 母性衛生, 31 (3): 366-372, (1990).
- 3) 本田千浪, 横山孝子: 男子学生の母性実習に関する調査 (第3報), 母性衛生, 34 (3): 222-229, (1993).
- 4) 横山孝子, 本田千浪: 男子学生の母性実習に関する調査 (第4報), 母性衛生, 35 (3): 143-149, (1994).
- 5) 松成裕子: 男子学生の母性実習における効果, 第24回日本看護学会集録母性看護: 150-153, (1993).
- 6) 横山孝子, 本田千浪: 男子学生の母性看護実習について改定カリキュラム後の実施状況, 看護教育, 34 (1): 60-66, (1993).
- 7) 齊藤祥之, 後藤幸代: 新カリキュラムにおける男子学生の母性看護学実習に関する一考察, 母性衛生, 38 (1): 43-49, (1997).
- 8) 栢澤康子, 大津廣子: 男子学生の母性実習に対する看護学生の意識調査, 第21回日本看護学会集録看護教育: 142-145, (1990).
- 9) 南和子, 山本光子: 男子学生の母性実習受け入れ要因の一考察, 日本助産学会誌: 105-108, (1994).